ほのぼの

第６２号
令和４年
１１月

発　　行
信行寺門信徒会
神戸市須磨区戎町１－２－３
TEL.０７８－７３２－５２０９

「元気でいこう」

前住職

アパートに一人で住む老婦人がおられました。御主人の命日に毎月お参りし、読経が終わるとお茶をよばれながら雑談したものです。五十年ほど前のことです。

ある日のことです。「息子が勤務先に近いところに家を建てたから一緒に住もうというけれども、私は行きとうないのです」と言われる。その理由というのは「私の部屋も用意してくれているので有難いことです。しかし、最初から一緒に住んでいない嫁や孫と毎日一緒ということになると、今のように〈いいおばあちゃん〉で通す自信がありません。また、食事の終わった後は、一番先にテーブルを離れて自分の部屋に戻らなければならないのも淋しいことです。そうならここにいて〈いいおばあちゃん〉で終わりたい」ということでした。自分のありようをしっかり見ておられる方であると感心しましたが、私にはできそうにありません。

人間は最後まで自分に「ほこり」を持っています。し

かし、人間の一生は「おしめで始まりおしめで終わる」。生まれた時と死ぬ時は他人の世話になるのです。自分が高齢者になって実感することです。

「裏を見せ　表を見せて散るもみじ」という有名な句があります。木の葉は、木を離れるまでは葉の表を見せ続けて木の役に立っています。それが木を離れて散る時は裏も表もなく、ただひらひらと落ちていくだけです。人生における表とは格好の良い私で、裏とは他人に見られたくない私の哀れな姿といってもいいでしょう。

「雨にも負けず」の詩で有名な宮沢賢治が亡くなる十日前に書かれた手紙があります。

「どうか今のご生涯を大切にお守りください。うわの空でなしに、しっかり落ち着いて、一時の感激や興奮を避け、楽しめるものは楽しみ、苦しまなければならないものは苦しんで、生きていきましょう」と書いてあります。

人の一生は旅に譬えられます。時間の中を一歩一歩、歩む人生の道でいろんな風景を見ることになります。幼年期・青年期・壮年期・老年期それぞれの風景があります。出会いと別れ、いずれも一期一会の世界です。また、いろんな境遇も経験します。「楽なように、苦のないように」と思いますが、移り変わる世界を生きているので生老病死は避けられません。

楽しくうれしいことだけで人生は過ごせません。辛くて悲しい風景もあります。ぶざまな姿もわたしの現実です。避けられないのですから。

「闘魂」を旗印にして世界を舞台に活躍されたプロレスラーのアントニオ猪木さんは元気な時の勇壮な姿だけでなく、晩年難病を患い七十九歳で亡くなられる直前まで、難病と闘う自分の姿をテレビで公開されました。大活躍をされていた時代の姿と違い病身の姿はみんなに見られたくないものです。しかし、みんなに元気を伝えようとして、あえて弱々しい病身の姿をさらし「元気ですか。元気があれば何でもできる」と、心の底から叫ばれる姿に拍手喝采です。

心を元気にしましょう。地に落ちた木の葉は新しい木の芽を育てる力となって役立っています。お念仏を申す身になって仏さまにならせてもらいましょう。

七高僧シリーズ

「師主知識の恩徳・・」法然上人③

住職

法然上人のもとに集まる人々が増え、新しい教団となってくると、旧仏教側からの批判がなされるようになりました。そして七十二歳の時、専修念仏の停止を求めた天台宗の僧に対して弾圧を回避するために法然上人が門弟たちに示した「七箇条起請文」という制誡の書を作りました。法然上人の署名につづいて門弟たちが連署しており、親鸞聖人も当時の名前「僧綽空」で八十七番目に署名しています。これによって一時的に比叡山からの弾圧は収まったものの、今度は興福寺から朝廷に念仏禁止の要求がなされました。全ての人々が「ただ念仏のみ」で救われる専修念仏の教えの広まりは既存仏教教団の基盤をゆるがす容認できないものだったからです。法然上人以前の仏教は国家鎮護を目的としており、民衆のための教えにはなっていませんでした。法然上人が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と親鸞聖人に説かれたように、身分や性別の分け隔てなく全てのひとが平等に救われて行く「称名念仏」こそが阿弥陀さまの本願であるといわれて、ナムアミダブツと口に称えることを勧められました。専修念仏の教えが年々繋盛していく中、ある事件をきっかけに法然上人が流罪となる建永の法難がおきてしまいます。

その当時、法然上人の弟子であった住蓮と安楽は「六時礼讃」の念仏会を京都・鹿ヶ谷で主催していましたが、彼らの声明の声がすばらしいという評判を聞きつけた後鳥羽上皇の女官も上皇の留守中に法会に参加し、感激のあまり二人のもとで出家してしまったのです。それを知った上皇は激怒して、これを機に旧仏教側から要求され続けてきた法然教団の弾圧に踏みきりました。結果、住蓮と安楽等四名が死罪、法然上人・親鸞聖人等八名が流罪に決定してしまいます。流罪回避のために「今は表向きだけでも専修念仏を止めたらどうですか」と法然上人に門弟がお願いしましたが、法然上人の信念がゆらぐことはありませんでした。「たとえ首を切られても説かないわけにはいかない」と断固として断り、「流刑を恨みに思ってはならない。私は地方に赴いて念仏を人々に勧めるのが長年の念願であったので、いまこの縁によってその願いがかなえられる…」と平然と四国へ旅立っていかれました。　（続く）

夏期特別法座

今年も八月十八日に夏期特別法座をお勤めしました。今回で四十回目を迎え、【法題】「安らぎの心」住職、前住職の法話がありました。また、副住職のブッダライフストーリー（お釈迦さんの一生）を表したタンカ（仏画）のお話がありました。質問コーナーでは、「浄土真宗では般若心経はお勤めしてはいけないのでしょうか？　ろうそくの火はどのように消すのがよいのでしょうか？」など質問がありました。（日頃疑問に思っていることがありましたら、いつでもお聞きください。）

コロナウイルス感染症に対する行動制限の緩和の現状を考え、従来通りの時間設定、昼食ありで行いました。また、仏教讃歌なども皆さんで歌いました。

来年も皆さんお参りください。

お姉さん、ありがとう　お浄土で、また

前坊守

私達は信行寺の三人姉妹として育ちました。戦後の物のない時代、両親の苦労を見ながら、姉は家のため妹の私の面倒を優しく見守ってがんばってくれました。

戦後お寺も再建できてから、お花、お茶のおけいこが好きだった姉は資格を取り、長年お寺で教室を開いておりました。

お寺の行事のある時は、お義兄さんと二人早く来て、準備などの手伝いを欠かすことはありませんでした。私の片腕となっていつも頼りとなり、必ずそばにいてくれた姉。今、失って初めて存在価値が大きかったことをしみじみ感じています。

いつかは別れる時が来るとは思いつつ、肉親との別れの悲しみは言いようがありません。

お姉さん、本当に長い間お世話になり、ありがとうございました。今度はお浄土で会いましょう。

赤坂さんへの感謝

今年八月、赤坂敏子さんがお浄土に往生されました。前々住職の次女であり、前坊守の姉さんであります。若い頃は、お寺で茶道と華道の先生をしておられました。二年前に亡くなられたご主人といつも一緒にお参りされ、常にお寺のために尽力されました。

お寺で長くご一緒だった方々に赤坂さんとの思い出を聞きましたので紹介します。

お茶の教室の様子

赤坂様との縁は、コーラスに始まり、いつも仲良くしていただきました。一人一人に話しかけられ、ニコニコとしておられました。微笑みを施す「和顔施」言葉を施す「愛語施」をしておられた方だと思いました。私も見習いたいと思います。お世話になりありがとうございました。

いつも明るく声をかけていただきました。気配りをしてもらいうれしかったです。本当に優しい方でした。主人共々お世話になりました。

研修旅行、念仏奉仕団、その他いつも仲間に入れていただき本当に楽しかったです。思い出がいっぱいです。

奉仕団は何回もご一緒させていただきました。同じ部屋に泊まって語り、清掃した事、楽しい思い出です。

この年になると中々注意してくれる人も少なくなりますが、赤坂さんは笑顔でお茶はこんなふうに差し出した方がいいですよと教えてくれました。本当にうれしかったです。

法語カレンダー

たとえ一人になろうとも
仏はあなたと
共にある

今回は、本願寺出版社の法語カレンダー、十一月の言葉を紹介します。

富山県の浄土真宗本願寺派善巧寺の雪山隆弘さんの言葉です。雪山さんは、学生時代に俳優を目指して演劇活動をされ、卒業後は新聞社に入社してジャーナリストとして、さらにラジオパーソナリティとしても活動をされていました。そして、妻の実家のお寺を継ぐために僧侶となられ、「開かれたお寺にしたい」との思いから落語会や子ども会を開くなど、開かれたお寺として文化活動の場とされました。また、児童劇を始められ「雪ん子劇団」を結成しました。

別れの挨拶に使う英語「グッドバイ」のグッドはゴッドにつながり、別れてもいつも神様のおそばにいるという意味になるそうです。私達のブッダ、阿弥陀仏はいつでも、どこでも、今ここにまします。わたしから離れることはありません。それは、言葉を換えれば、「ブッドバイ」なのだと書かれています。

人は必ず別れをむかえます。しかし、阿弥陀仏の浄土の世界に生まれて、今この私を待っていてくれておられます。本当のやすらぎとなり依りどころとなるのが、お念仏「南無阿弥陀仏」です。親鸞聖人は、法然上人から「ただお念仏するばかりで、まちがいなく阿弥陀さまのお救いにあずかるのだよ。」という教えを聞くことによって、迷いの世界を乗りこえることができるよろこびを得られました。ここに親鸞聖人の依りどころが定まったのです。

日頃の疑問を考えよう

Q お寺で彼岸、永代経、納骨などいろいろな法要がありますが、十一月に行われる報恩講法要とはどのような法要なのでしょうか？

A 報恩講は、宗祖親鸞聖人のご命日である一月十六日をご縁として、阿弥陀如来さまのご恩と親鸞聖人のご恩を偲び、感謝させていただく真宗門徒にとっては最も大切な行事です。

報恩講の始まりは、親鸞聖人のご往生を縁として、門徒が仏法を聴く集いを開いて、自らの信仰を確かめ学び直そうという人達の集まりから始まったといわれています。この集いを「講」といいます。その源は、親鸞聖人自身が、師・法然上人のご命日に人々と寄り合い、仏法を聴き、お勤めをし、語り合っておられたことにあるといえます。その後、本願寺の三代覚如上人が聖人の十三回忌に「報恩講私記」を著したのをきっかけに各地に広まったといわれています。

私たちが生きていくうえには親の恩や師の恩など、いろいろなご恩があります。それぞれ大切なことですが、報恩講の恩は、私たちを救ってくださる仏さま（如来大悲）、そして私たちに先だって生きていかれた方々の勧めによって念仏の教えに遇い、一人ひとりが生きる依り処を教えていただいたご恩のことです。そのご恩に報い、先達の後に続いて、いつのどこの誰にでもかけられた仏さまからの「本当の願い」を共に聞いてまいりましょうという願いが、報恩講という仏事には託されているのです。

本願寺では、毎年一月九日の逮夜より一六日日中まで、七昼夜のご正忌報恩講が勤められます。ご命日のことをご正忌といいます。

別院や一般のお寺では、日時を早めて営む慣例があり、「お取越し」とも呼ばれています。また、ご門徒の家庭でお寺さんと日程を合わせて報恩講をお勤めされる地域もあります。

皆さんも信行寺の報恩講法要に是非お参りください。

信行寺行事予定とご案内

✧報恩講法要

十一月二十六日（土）法話　住職

十一月二十七日（日）法話　前住職

二日間とも午後二時より三時半頃までの予定です。

ご都合に合わせて、一日でもお参り下さい。

✧新春初法座

令和五年　一月五日（木）午後二時より

お正月をお寺でお迎えしましょう。

ご一緒に年の初めのお勤めをし、その後、法話をご聴聞ください。

編集委員より

今年も八月十六日に納骨盆法要が執り行われました。

お盆のお墓参りというお気持ちでしょうか、普段の法要にお顔が見られない方々も多く見受けられます。年に一度でもお目にかかれてうれしく思います。

ご家族おそろいでお参りされ、お子さんやお孫さんの姿も見うけられます。どうかこの機会を大事にして、ご縁が続いてほしいと願うばかりです。

というのも、最近では「あなたのお家の宗旨は？」「お寺はどちらですか？」と尋ねてもご存じない方が多いと感じています。

是非とも、信行寺門信徒の皆様には、お子さんやお孫さんが「浄土真宗本願寺派で信行寺さまとご縁をいただいております」と応えられるようにお家で伝えていただきたいと思います。昨年住職継職が行われたように、各家庭でもお念仏が継承されてほしいものです。

いつまでもお寺に心を寄せてお付き合いが続きますように願っています。

石田　智子